◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

海外リポート

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

第4回国際細胞生物学会に出席して

東城　庸介

東日本学園大学歯学部歯科薬理

去る8月11日から，口腔生化学の田隈講師とともに米国とカナダを訪れる願ってもない機会を本学から与えられ，大へん貴重な体験をさせていただきました。目的は，モントリオールで開催される第4回国際細胞生物学会への出席，研究発表，そして，米国の3つの唾液腺研究施設を訪問し，私たちの最近の研究についてセミナーを行うことでした。

私たちは最初にワシントン市近郊にあるNIHのDr. Baumの研究室を訪れました。ここは田隈先生が以前に留学していたところで，彼にとってはなつかしい再訪問というわけです。Dr. Baumは唾液腺分泌機構の生化学的研究では世界をリードする1人ですが，まだ40代半ば，大へん気さくで，我々を自宅に招待して自らの手料理をごちそうしてくれました。NIHのDental Research部門には他にもDr. Hand, Dr. Oliver, Dr. Turnerといった文献のみで知る世界的な唾液腺研究者がおり，わざわざ私たちのセミナーを聞きに来てくれました。私は「耳下腺とカルモジュリン」，田隈先生は「耳下腺のA-Kinase」についてセミナーを行ったのですが，出席者たちが予想以上の興味を示してくれたのはとてもうれしいことでした。

ワシントンの暑さには閉口しましたが，次に訪れたモントリオールはそれに比べ別世界でした。参加した国際細胞生物学会は生体機能を細胞レベル，遺伝子レベルで追及するほとんどすべての分野を包括した学会で，8月14日から19日まで，市の中心にある会議場で行われました。シンポジウム153題，ミニシンポジウム217題，一般演題2237題，他に早朝からのPlenary Presentationなど，盛大なものでした。日本からも医学，理学を中心に多数の研究者が参加し，歯学からは私たちの他に，広島大・口腔生理の菅野義信教授，朝日大・口腔生化のグループ，神奈川歯大・解剖の西川純雄博士，徳島大・口腔外科のグループなどの発表がありました。

この学会でのもう1つの収穫は，cAMPやCa^{2+}による唾液腺分泌調節について幅広い研究を続けているフランスのDr. Rossignolに会えたことです。先年，耳下腺の分泌や形態に対するサイトカラシンの影響を研究中，おもしろいデーターが得られたので，図書館で文献検索したところ，Dr. Rossignolがすでに1985年のBiology of the Cellという雑誌によく似た結果を報告していることがわかり，くやしい思いをしたことがあるのです。すぐに彼の研究を引用して論文を投稿したのですが，そのことを話すと彼は大へん喜んでいました。そして，彼の最近の研究について熱心に説明してくれましたが，私の貧困な英語力と彼のフランス風Englishのため，しばしば話がかみ合わなかったのは残念でした。

私たちは美しいモントリオールを後にして，再び米国に入り，ノースカロライナのNIEHSのDr. Putneyとコロラド大学のDr. Quisselを訪問しました。この訪問もきわめて印象深いものでしたが，紙面の都合でまたの機会に書かせてもらいます。最後に，今回の海外出張に際して，本学の関係者の方々に大変お世話になりましたことを厚くお礼申し上げます。